

14歳 山形から上京
31歳 初めての歌集『赤光』を出版
44歳 『アララギ』編集発行人に就任
63歳 故郷へ疎開

vol. 10

斎藤 茂吉

▶▶ Saito Mokichi

困難に遭いながらも 「医者」と「歌人」の 二足の草鞋を履き通した人生



1882年、山形県上市市生まれの歌人、精神科医。医者として研究や留学、病院運営をする傍ら数々の短歌を世に送り出し、歌誌『アララギ』の編集発行人も務める。晩年には文化勲章を授与された。

▶▶▶ 学業に励む傍ら出合った作歌の世界

『赤光』『あらたま』など数々の歌集を世に送り出し、大正から昭和にかけて近代歌人として活躍した斎藤茂吉は、1882年（明治15年）に現在の山形県上市市で養蚕業も兼営する小地主の三男として生まれた。経済的に安定した幼少期を過ごすことができた茂吉少年は、^{かみのやま}親戚から凧絵を教わったり、菩提寺の住職から習字を学んだりしながら、自然の中でのびのびとした子ども時代を送った。

14歳で地元の高等小学校を卒業した後、東京で医院を営む親戚（のちに養父となる）宅へ身を寄せることになった茂吉は、医学の道を志し学業に励む傍ら、幸田露伴や正岡子規の著作に感銘を受け作歌を開始。子規の後継者である伊藤左千夫に入門すると、歌誌『^{あせび}馬酔木』や『アララギ』に投稿を重ね、いつしかその編集にも携わるようになっていく。一方、実生活では東京帝国大学医科大学卒業後に精神医学を専攻して病院に勤務し、以後、歌人と医者との二足の草鞋を履く人生を歩むこととなる。

▶▶▶ 歌人として、医者として

31歳の時に初めて出した歌集『赤光』は評判を呼んだ。翌年、養父の次女と結婚後、長崎医学専門学校の教授となり、同地でしばらく教鞭をとった後、39歳で精神病学を学ぶためにオーストリア・ドイツへ留学する。異国で研究生活に没頭する最中にも実父の死去や関東大震災による家族の被災、さらにはヒットラーの台頭によるドイツの世

情不安など数々の波乱に襲われながらも、3年間の留学を何とか終えて帰国の途に就く。しかし日本の地を踏む直前、養父の創設した病院が全焼するという不運に見舞われ、早速、病院再建に腐心しなくなかった。

公私ともに多忙で気の休まる時がなかったのか、留学前に歌集『あらたま』を出版して以降は目立った活動をしていなかった茂吉だが、帰国の翌年、44歳で学生時代から携わってきた『アララギ』の編集発行人となる。その後は短歌・随筆・評論など精力的に文学活動に取り組む一方で、再建した病院の院長に就任し、歌人として、医者として、縦横に活躍した。そう聞くと順風満帆な人生のように思われるが、親しかった歌友たちとの死別や妻との不和など何かと心労の絶えない日々だったという。そのような中であっても万葉集の歌人・柿本人麻呂の研究に没頭し、58歳の時、その業績により帝国学士院賞を受賞している。

東京大空襲の翌月、63歳になっていた茂吉は単身故郷へ疎開。約2年半、途中、肋膜炎を病むなどの苦労があったものの、最上川をはじめとする故郷の自然を眺めながら作歌に耽る穏やかな田舎暮らしを満喫した。69歳の時には文化勲章の荣誉にあずかり、翌年には『斎藤茂吉全集』全56巻も出版されたが、1953年（昭和28年）、心臓ぜんそくにより70年の生涯を閉じた。歌人としても医者としても波瀾万丈な人生を送った茂吉だが、彼が身の内に抱えていたであろう葛藤や模索は数々の短歌へと昇華され、現代も私たちの心を慰めてくれている。

（執筆／ライター 青山 繁樹）